

# 異文化コミュニケーション NEWSLETTER

No. 11

November 1991

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE  
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES  
1-4-1, Wakaba, Chiba-shi, Chiba-ken, 260 Japan

神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所  
〒260 千葉市若葉1-4-1  
(Phone) 0472-73-1233 (Fax) 0472-72-1777

## 幕張夏期セミナー「日本の大学における異文化 コミュニケーション論の教育と方法」報告

神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所

1991年9月13、14、15日の3日間にわたり幕張にある海外職業訓練センター(OVTA)において開催されたこのセミナーでは、中部、関西、九州など全国各地から30余名の研究者が集まり、日本の大学における異文化コミュニケーション教育とその方法について広範な角度から熱のこもった議論が繰り広げられた。以下は当セミナーの内容の概略である。

13日はまず、異文化コミュニケーション研究所の所長である古田暁氏の「大学教育と異文化コミュニケーション」と題する講演で始まった。この中で古田氏は世界が目まぐるしく変化するという点で現代が11世紀と酷似していることを指摘し、その現代において必要性が増している異文化コミュニケーション教育はこの変化に対応できるようにダイナミックで包括的なものでなくてはならない。そして、同時に日本社会の特性をしっかりと把握する必要があると述べ、異文化コミュニケーション教育の方向づけに関して一つの示唆を与えた。

続いて、神田外語大学の久米昭元氏は昨年秋に異文化コミュニケーション研究所が実施した「日本の大学におけるコミュニケーション教育」に関するアンケート調査の結果を質問項目別に報告し、異文化コミュニケーションを含めたコミュニケーション教育全般についての現状を述べ問題点を指摘した。また、神田外語大学で開講している異文化コミュニケーション論についての概要説明を行った。

14日の午前中はまず、東京女子大学の御堂岡潔氏が現代文化学部という日本で唯一のユニークな学部のなかのコミュニケーション学科で担当している3つの異文化コミュニケーション科目についてカリキュラム上の位置づけとそれぞれの科目の概要説明を行った。2年次を対象として開講されている基礎演習では概念、研究法の習得、問題意識の養成を目標にし、演習では3年次に卒論に向けての問題意識の養成、研究の実践を、そして4年次にはオリジナルデータを織り込んだ卒業論文作成を目指して授業を行っており、国際コミュニケーション研究では国家・国民イメージを中心とした異文化コミュニケーションの授業を進めていることを説明した。

続いて、桃山学院大学の遠山淳氏は同大学での異文化コミュニケーション教育の紹介とともに異文化コミュニケーション学についてのいくつかの提言を行った。異文化コミュニケーション学を確立させるための具体的な課題としては、博士課程設置の必要性、英語教育からの独立、そして英語コンプレックスの解消の3項目を挙げた。まず、博士課程の設置については、異文化コミュニケーションが学問として独立するには国内で最高学位の授与がなされるべきであること、研究者の養成においてもほとんど欧米の教育のみに頼っている現状からの脱皮の必要性、の二点が指摘された。次に英語教育からの独立に関しては、日本人と世界の各国、各地域の人々との異文化コミュニケーションを考えた場合、その内容は英語教育の枠内のみにはまるものではないことを指摘した。また、英語コンプレックスの解消の為に日本語論文を重視すること、そして修士/博士論文の題目や要旨は複数の外国語で世界に公表すること。また、英語以外の外国語の学習の必要性を指摘した。

午後からは、大妻女子大学の石井敏氏がコミュニケーション論を中心に捉えた異文化コミュニケーション教育および異文化コミュニケーション研究についての包括的モデルを提示し、研究上の視座については比較文化と文化の相互作用を統合しながら進めることの重要性を強調した。また、同大学の英文学科におけるセミナーのうち異文化コミュニケーションの分野を志望する学生が近年益々増加していることを指摘した。さらに、異文化コミュニケーションのセミナーの授業の進め方として、グループでの研究と発表を取り入れるなど授業展開の説明を行った。

続いて、3名の講師の先生方を囲んで質疑応答が行われた。異文化コミュニケーション教育と語学をどう関連づけるか、また、異文化コミュニケーションの授業で実用性を考慮することの是非、授業展開のしかたなどについて盛んに議論が交わされた。

夕食後は参加者が2グループに分かれてディスカッションを行った。「学生の異文化理解促進のための教材」について話し合ったグループでは文化相対主義、empathyなどの概念を折り込んだ教材についてや、学生の異文化理解や学習意欲を高めるために当科目の講義の導入部分における工夫などについて様々な意見が出された。また、授業の目標をどこにおくか、評価はどうするかについても意見が交わされた。

「日本の教育環境の中で何を如何に教えるか」と題したディスカッションではまず、日本の環境を「日本人ばかりで大人数、同年齢であり、とても均質的である」などと定義付けることから始まった。そしてその中で必要な異文化コミュニケーション論の目標としては文化的相違点に対する意識を培う、つまり、何が違うのかそして何故違うのかについて分析能力を養うことだという意見が出された。また、教育内容とその順序については、まず第一にコミュニケーションとは何かについて教え、次に文化一般、日本文化、異文化について教えるべきであるとの意見があった。また、コミュニケーション能力の育成と開発の必要性が指摘された。

最終日の15日は、前日までの議論を踏まえた上で「異文化コミュニケーション教育の現状と将来の展望」という議題のもとで参加者全員によるラウンドテーブル・ディスカッションを2時間半にわたり行った。日本における異文化コミュニケーション教育の目的、また分野としての異文化コミュニケーションの問題、捉え方、研究方法、そして将来の展望などについて様々な角度から意見が出された。具体的には、企業等で行われている異文化コミュニケーション・トレーニングの手法をどう応用するか、語学教育の中で異文化コミュニケーションをどう捉えるか、さらに当分野のもつ学際性をどのように積極的に生かしていくべきかなどについて、真剣かつ自由な討議が続けられた。

以上、セミナーの内容を簡単に紹介したが、3日間のセミナーを通して、異文化コミュニケーションはこれからの日本の大学にとって必要な分野ではあるが、比較的新しく、また学際的であるがゆえにアプローチ、教育法ともに未確定であり、教員各自も手探りの状態で授業を行っているという声が多く聞かれた。そして、このような相互啓発・情報交換の場を持つことが各教員にとって、大いに必要であるとの意見も多く出され、主催者側もこのような場を定期的に持ち続けることの必要性を痛感し、セミナーを終えた。

## 幕張夏期セミナーに参加して

慶応義塾大学助教 手塚 千鶴子

『大学における異文化コミュニケーション論の教育と方法』と題するワークショップが、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所の主催で行われた。以下に連想風の感想と、そこから持ち帰った自分自身の課題について述べてみたい。

ワークショップが終わり4週間が過ぎたというのに、あの時灯った何とも言えない温かな確信といったものが未だ消えていない。これは私自身の怠慢を物語っているとも言える。しかし最大の原因は、動機、背景、現在置かれた立場が異なるものの異文化コミュニケーションへの情熱を同じくする者同志が、気持よくオープンなコミュニケーションを通じ、自らの今後の方向の目安を、直観的にはあるが確認できたからではないかと思われる。

勿論ワークショップの本題自体について十分な議論がなされたというわけではない。また、講師陣に比べ、我々参加者にもう少し積極的姿勢が望まれたように思える。ともあれ、3日間のレクチャーと議論を通じ多様な視点が提示され、各参加者はその受け止め方に応じた自らの宿題を見つけ、それぞれ自分なりにそれを解いていきたいとの希望と意欲を燃やしつつ会場を後にしたのではないだろうか。これには講師の先生の素晴らしさと同時に、さりげなく心を砕いて実り多いコミュニケーションの場を演出された異文化コミュニケーション研究所の皆様のご努力があったことは確かである。

さて私自身について言えば、それまでモヤモヤしていたものがふっ切れた思いがしている。セミナーに参加して明らかになったことが3つ程あるが、それらは、1)異文化コミュニケーション論の教育は各自の大学の環境条件のもとで、独自に味つけしたものを打ち出していけばよいとの確信。2)異文化コミュニケーション論と比較文化論との関係が見えたこと。前者が二つの異なる文化を担う二人の間の相互作用を扱う動的な研究であるのに対し、それを補完する形で、二つの文化を交差的に比較する比較文化論があるということである。3)自分自身の異文化コミュニケーションへの取り組みの核心にあるものが見えてきたこと。

3)で見えたものとは以下のような関心・興味の持ち方である。a)異文化コミュニケーションの難しさ、楽しさ、豊かさに端的に心魅かれていること。それはつまり人間が変わることに対して抱く不安、恐れ、スリルと興奮を経験しかつ、人と共有したいとの思いである。b)日本文化の本質、日本のコミュニケーションが何であるかということへの知的関心。c)その日本がこれからどのように変わろうとしているのか、動的な文化の変容の問題への関心。さらに、今後 language shiftのみならず culture shiftをも余儀なくされるであろう日本が、いかに異文化コミュニケーションを使いこなしていくべきかという政策論への関心もある。

これら自分自身の関心を如何に教育の中に位置づけていくかが私の課題であるが、大枠として次のような三本柱を立てたいと考えている。a)は異文化コミュニケーションと異文化適応論に、b)は比較文化論、日本文化論、日本的コミュニケーション論に、そしてc)は、国際化の中での日本文化変容論または、日本の異文化コミュニケーション戦略論と言ったものにまとめられるのではないだろうか。これらの柱に十分な肉づけをして教育、研究を深めて行くことが私にとっての緊急の課題であり、それを湘南藤沢キャンパスで来年度から始まる3年生対象のカリキュラム開発に結実させなくてはならないと考えている。

【研究所より】幕張夏期セミナーに参加された多くの先生方からお手紙を頂き、心より感謝しています。残念ながらスペースの関係で紙上に掲載できませんが、あしからずご了承下さい。

# 日本の大学におけるコミュニケーション教育の実態調査報告 II

神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所

前回の報告では、調査の概要および簡単なコミュニケーション科目の開講概要を紹介したが、今回は、講義概要、将来必要であると考えられている科目、またコミュニケーション科目を教える上での問題点などについての調査結果を報告する。

## (1) コミュニケーション科目の講義内容

分析の対象としたのは回答者から直接回答のあったものの中で講義内容について記述のあった科目ないし、送付された講義題目、講義要覧などに講義の内容について記述のあった科目のみとした。

まず、講義内容と講義題目にずれがあるものもあるため、全ての対象講義内容を講義題目によって分類した。分類は 1. コミュニケーション論、2. 異文化コミュニケーション論、3. スピーチ・コミュニケーション、4. 語学、5. 国際コミュニケーション論、6. 人文・社会科学のアプローチのコミュニケーションとした（この分類は調査報告Iで報告したコミュニケーション科目分類法に基づく）。その後、各分類グループごとに主な内容を表すタイトルをつけ分類した。

講義題目からコミュニケーション論と判断されたものの中で最も多かったのはコミュニケーション一般基礎理論であり、24科目がこれに含まれる。次には言語・非言語コミュニケーション（5科目）、研究指導（5科目）、異文化コミュニケーション論（4科目）、対人コミュニケーション（4科目）、マス・コミュニケーション（3科目）などが続いている。その他オーラル・インタープリテーション、言語学、中国事情などが含まれていた。

異文化コミュニケーション論では、概論が14科目と多く、演習（4科目）、異文化交流史（3科目）、日米コミュニケーション（3科目）が続き、その他に会話分析、イメージ研究、国際化の理解などがあつた。

スピーチ・コミュニケーションのなかでは、スピーチが7科目、あとはオーラル・インタープリテーション4科目、コミュニケーションスキル4科目、ドラマ3科目、スピーチ・コミュニケーション全般が3科目と続いていた。

語学では、会話分析、英作文、英語講読、ドイツ語会話、英語コミュニケーション、会議通訳、英語聴解、スピーチ、外国語教授法など様々であり、語学のカテゴリの中で各教員が様々な形でコミュニケーション的アプローチを応用し、授業を行っていることが窺えた。

国際コミュニケーション論では概論が2科目、その他、価値観、現代アメリカ、国際ビジネス交渉、イメージ研究、異文化交渉史などが挙げられていた。

人文・社会科学のアプローチのコミュニケーション科目でも、内容は様々で、コミュニケーション概論、情報社会論、文化社会学演習、政治とマス・メディア、言語

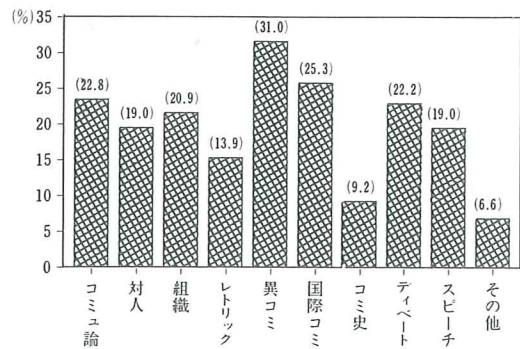
と身体行動、態度変容、文化とコミュニケーション、自己論、システム理論の自己発展、説教学、人格心理学などが挙げられていた。

以上、概要からみたコミュニケーション科目を紹介したが、各教員、各大学・学部でアプローチが異なっており、また科目の捉え方も、「コミュニケーション能力」の養成を中心に捉えているものから、「コミュニケーション理論」に対する理解を目的とするものまで、非常に多岐にわたっていた。

## (2) 将来必要と考えられるコミュニケーション科目

学内で将来必要であると考えられるコミュニケーション科目について、あらかじめ科目名を挙げ、その中から複数回答をもらった。アンケートで挙げた項目と結果は以下の通りである。

表1 将来必要と考えられるコミュニケーション科目



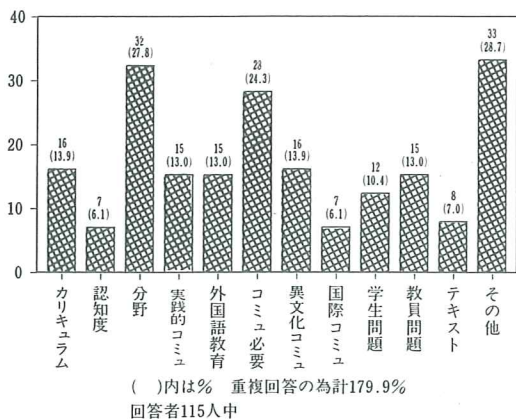
重複回答のため計189.9%/回答者316人中

表1に示す通り、将来必要と考えられているコミュニケーション科目は異文化コミュニケーション論（98名、31.0%）、国際コミュニケーション論（80名、25.3%）、コミュニケーション（概）論（72名、22.8%）、ディベート/会議法（70名、22.2%）、組織コミュニケーション論（49名、20.9%）、対人コミュニケーション論（66名、19.0%）などであった。その他に、非言語コミュニケーション、コミュニケーション哲学、アーギュメント理論、言語と文化、外国語を用いた異文化コミュニケーション実習、情報化社会論、比較宗教学論、比較風土論、言語学などが挙げられた。

## (3) コミュニケーション科目を大学で教える場合の問題点、将来の展望

アンケートの最後に自由記述で問題点、将来の展望について述べてもらった。記述内容は多岐にわたっていたため、分析にあたっては、内容分析の技法を用いた。分析に使用したカテゴリーは、1. カリキュラム（構造）上の問題、2. 「コミュニケーション」に対する認知度の不足、3. 学問分野としての「コミュニケーション」の問題、4. 実践的コミュニケーション教育の必要性、5. 外国語教育の一環としてのコミュニケーション教育、6. コミュニケーション科目の必要性、7. 異文化コミュニケーション、8. 国際コミュニケーション、9. 教員の問題、10. 学生の問題、11. テキスト及び教材、12. その他の12項目である。分析の結果を以下に記す。

表2 コミュニケーション教育に対する展望・問題点



カリキュラム上の問題点としては、コミュニケーション科目を開講したいが、カリキュラム上の制約があって出来ない(10)、カリキュラムの中で割り当てられた時間が少ない(1)、などの意見が含まれていた。

コミュニケーションに対する認知度の不足の中には、学問分野として認められていない(5)、という意見に代表されるように他の教員の理解が得られず、孤軍奮闘している姿が窺える意見が見られた。

分野としてのコミュニケーションの問題では、学者間でのコミュニケーションに関する認識の合意がない(7)、語学と結びついている(3)、実学的すぎる(3)、日本独自のコミュニケーション学を(4)、理論体系の確立の必要性(2)、統合的アプローチの必要性(6)など、様々な意見が述べられていた。

実践的コミュニケーション教育の必要性では、スピーチ、会議法、討論などの教育(4)、コミュニケーション能力(3)、中・高等学校レベルでのスピーチ教育(2)、などの必要性が挙げられていた。

外国語教育の一環としてのコミュニケーション教育では、外国語とコミュニケーションの結び付きを強くすべき(5)、英語コミュニケーションとして、充実するべき(5)、などが代表的意見であった。

コミュニケーション科目・学科の必要性を認めた意見の中では、大学院にコミュニケーションの専門講座が必要(3)、英語から離れた科目が必要(3)などの意見が見られた。

異文化コミュニケーションに対する意見の中では、アジア・中東などを視野に入れた科目の必要性(2)が指摘され、国際コミュニケーションについては、科目として必要(4)、アジア、中東、アフリカも視点に入れる必要(1)などの意見があった。

学生の問題としては、知的関心度が低い(3)、受身的(1)、などが指摘され、英語教育との関連としては、英語力が低い(6)が主として挙げられた。教員の問題では、専門家がいな(10)という指摘が一番多かった。

テキストおよび教材については、優れたまたは適当な

教材が不足している(6)という意見と、AV教材の開発の必要性の指摘があった。

以上コミュニケーション教育に対する展望・問題点の分析結果を簡単に紹介したが、コミュニケーション教育・コミュニケーション学について各教員が様々な意見・展望を持っており、また問題点としてはカリキュラム上の制約や、他教員の重要性の認識が低いことから思うようにコミュニケーション科目を増やせない、などといった点があることが浮かび上がった。全体的に言えることは、現在コミュニケーション科目は時代の要請に応じて徐々に大学教育の中での必要性を認められつつあるが、これらが大学のカリキュラムの中にしっかりと定着するためには大学側に思い切った意識変革と実行力が要請されるということである。

(古田暁、久米昭元、長谷川典子)

(なお、詳細は1992年に発行される「異文化コミュニケーション研究」第4号に掲載予定です)

## 学会・研究会予定

### 名古屋国際教育ワークショップ

(異文化コミュニケーショントレーニングの基礎を身につけるためのワークショップ)

日時：11月22日(金)・23日(土)・24日(日)

場所：岐阜県多治見市神言会ログハウス

問い合わせ先：南山大学外国語学部英米科

近藤祐一 tel.(052)832-3111 ex.552

### 専門家のための異文化コミュニケーション・ワークショップ

講師：Drs. Milton and Janet Bennett

日時：① 11月23日(土)・24日(日)

② 12月7日(土)・8日(日)

場所：国際文化会館(六本木)

問い合わせ先：クロスカルチャー・トレーニングサービス

tel.(044)989-0069(荒木)

## 研究所より

研究所図書室では全国の各大学・研究機関および個人の研究者の方々から異文化コミュニケーションに関連した図書、論文、紀要等をお送り頂いています。このスペースを借りて心より御礼申し上げます。読者の皆様方からも当分野に関連した論文等をお送り頂ければ、内外の研究者の相互啓発に役立つよう整理保管させて頂きます。また研究会のお知らせ、推薦図書その他の情報やアドバイスがありましたら、是非下記までお寄せ下さい。

〒260 千葉市若葉1-4-1

神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所